

豊明希望チャペル礼拝

2024/4/21

「見ないで信じる者の幸い」

ヨハネの福音書 20 : 24～29

今日は、「トマス」という一人の弟子にスポットがあてられています。

トマスは、イエスの十二人の弟子の一人です。「疑い深いトマス」とあだ名される人物で、今日のところは、まさにトマスがそう言われる元になった箇所です。聖書には、他にあまりトマスのことは書かれていませんので、「疑い深い」というイメージがすっかり定着してしまいましたが、今日の箇所を最初に簡単に紹介すれば・・・その経緯はこうです。復活のイエス様が弟子達に現れた。しかしその時に、トマスだけが一緒にいなかった。後で弟子たちはトマスに「わたしたちは主を見た」と証言しますが、彼は、かたくなに「わたしは決して信じない」と言い張る。さらに「あの方の手に釘(くぎ)の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」とまで断言する。ここに歴史上、「疑い深いトマス」とあだ名される姿があるわけです。



しかし、一方で、トマスの疑う姿勢を評価する人たちも多いのです。自分の目で見ないと信じないという姿勢は、実証的で科学的な立場で、これは今日の科学に通じる合理的精神ですから、現代人には、共感や親近感を覚える人も多いのではないのでしょうか。今日は、まず、トマスという人物に思いを巡らせたいと思います。

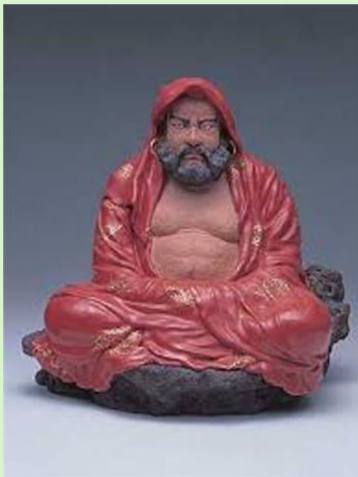
ちなみに・・・これはなんでしょうか。→そうです。ダルマです。

ダルマは、トマスがルーツだとも言われている事をご存じでしょうか。誰かに話すときの話のきっかけとして覚えておいて無駄ではないと思うので、その話をしますが。



聖トマス行伝という聖書の外典と言われる書(3世紀に成立したとされる、わりと古い書ですが、後世に物語として創作されたもの・・・)に、トマスは、インドに遣わされとあるのです。それで、今は、その伝説を元に建てられた聖トマス教会が、インドの南部にあります。

トマス行伝では、使徒達、弟子達が、イエス様の世界宣教命令に従って、様々なところに遣わされ、トマスはインドに遣わされたと書いてあるのです。そこには、トマスは、行くのを拒んだが、その時、復活のイエス様が現れ、インドから来た商人に、インドの王様が大工さんを探していると言うことで、イエス様と同じく大工であったトマスと、あそこにはいますよ、あれを連れて行ってくださいと言って、証人が、トマスにあれは誰なのかと聞くと、わが主ですと答えたので(「20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」)、主人が言うことなら、そうしようと奴隷として、彼を連れて行ったと書かれているのです。それで、伝説では、トマ(=だるま)として語り継がれたというわけです。



ちなみに、達磨太子の昔の絵には、耳輪がついていますが、これは、インドでは奴隷の印で、奴隷として売られたという証拠?というわけです。

「見ないで信じる者は幸いです」と信仰の本質を教えられたトマスが、見たこともない、遠くの、まるで異教世界に遣わされたのは、この経験が必要だったのかも知れません。

さて、今日のこの20章の終わりの、30, 31節では、「この書に書かれていないが・・・」とあり、まるでヨハネの福音書は、この20章で、終わっているかのような書き方をしてありますが、ヨハネは、実際、いったん、ここで閉じよとしたとも言われています。とすれば、このトマスの箇所は、ヨハネ伝のまとめの部分となつて、このトマスのエピソードを通じて、ヨハネがもっとも言いたかったことは、トマスのことであり、今日の結論となりますが、すなわち、ヨハネの教会の、イエス様の姿すら見たことのない教会の人々に、20:29「・・・見ないで信じる者は幸

いです。」ですという大切な真理を教えたかったということだったのかもしれないという事であります。今日、私たちも、トマスのごとく、一緒にいられなかった者ですが、見ないで信じる者にこそ、それこそ大切な事だとおっしゃって下さる、主のことばを味わっていきたいと思います。それは、現代に生きる私たちにこそ大切な言葉だからです。そんなことを思いながら、見ていきましょう。

まず、事情から見ていきます。

「20:24 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。20:25 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘(くぎ)の跡を見て、釘(くぎ)の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。」

前回の箇所で、イエス様が現れたとき、トマスはいなかったというのです。逃げて、閉じこもっていて、一步も部屋から出られない、弟子達のために、勇気をもって、必要なものの、買い物か何かにでかけていたのでしょうか。彼は、イエス様のいなくなった後、その夜にでも、帰って来て、彼は、あとから、イエス様の話をきくことになりました。彼の反応は、「証拠がないと、いや、見たって、本物のイエス様か、わからない。なんなら、クギの後に指を差し入れて、槍の刺された後に、手をいれて確かめないと信じない」と言いました。最初に触れましたように、彼が、理性的で、科学的な人というくくりで語られるのですが、この著者ヨハネは、そういう、ヨハネの教会の異邦人へのメッセージを含めて、このエピソードを引用したとしても、前後の文脈を見る時、彼は、よりも、よって、なんで自分のいないときにイエス様はあらわれたのかということが、面白くなかったのかもしれないなあとも思います。しかし、イエス様は、そんなトマスのために、いわば、そんなトマスだけのために、もう一度、現れて下さったのです。こうあるとおりです。

「20:26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。」

「8日後」ずいぶん、時間が空きました。その間も、弟子達は、イエス様が現れたねえ。すごいねえ。イエス様が私は復活をされると言われたとおりだねえ。本当に、イエス様は神さまだったね。私たち罪人を救うために、天から来て下さったのだねえ。と、彼らは、一週間ずっと、話していたと思います。その間、トマスは、気に入らないなあと思いながら、ずっと、もんもんとしていた事でしょう。

鍵がかけられていた現状は、8日前と何も変わりませんでした。弟子達は、まだ鍵をかけたままでした。

シャローム、平安あれと、あの時を同じ言葉をおかけになりました。これで、3回目です。不安に思う必要はない、私の平安はあると。

そう考えると、これは、トマスだけのために現れたのではなく、また、もとの不安な状態に逆戻りしてしまった、もういちど、「信じる」ことの大切さを、弟子

達が自覚するためにも、もう一度現れて下さることは、彼らに、必要だったと言うことなのかもしれません。

イエス様は、トマスにこそ、語りかけます。

「20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」」トマスは、答えました。

「20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」」

聖書の中で、最大最高の信仰告白とも評されるのが、この28節の彼の告白とされています。そんな最上の信仰告白が、突然、電撃をあびたように、彼の口から突然出てくるのです。あれほど、信じないと言っていた彼のことからすると、あまりにも唐突です。すくなくとも、ヨハネは、それについて、どうして、こう言えたかのヒントも、我々に与えようとしません。せめて、「聖霊によって彼は悟った」とか、言ってくれば、聖霊なんだな・・・と理解は出来るのに。言うなれば、先を、急ぐように、この言葉を、ある意味、強引に、トマスだけでなく、ヨハネの教会の人たち、そして、この時代に生きている私たちにこそ、聞かせようとしているのだと感じます。

そうです。こうイエス様は、言われます。

「20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」」

「見ないで信じる人たちは幸いです。」幸いなのは、見て信じることではない、見ないで信じることだと言われるのです。イエス様のおっしゃれた言葉を良く見ると、見て信じたことを否定しているわけではありません。見て信じたんだねと現状を肯定しておられます。それを悪いとは言っていない。

しかし、見て信じたことを、「幸い」と言わず、見ないで信じることをこそ、「幸い」と言われたのです。

ここにペテロ先生がいるとして、ペテロが、イエス様を前に、はい、私はあなたを直接見て信じました。と言ったら、イエス様が、ああ、見て信じたねと言い、私が手をあげて、イエス様、私は見ないで信じましたと言ったら、イエス様は、私に、あなたは、見ないで信じたのだね。それは、素敵だ、それは、幸いだと言われて、私は、ペテロのほうを見て、「えへっ (笑)」と、どうだという顔で、ペテロを見下す？のです。

この意味は、トマスに対してのことで、イエス様は、トマスが私を、見る事が出来なかったのは、あなたのチャンスだったのだと言いたかったのかも知れません。

あなたは、私は見なかったから、そこで、私は見なかったけれど、イエス様がおっしゃられた、私はよみがえると言われて、その言葉を信じる事が出来るチャンスを逃して、結局、私を見てしまった。あなたは、私を見ないで信じるチャンスを逸してしまったのだということなのかもしれません。あるいは、あなたは、見せなくても信じる人たちと違い、あなた一人こそが、私を見ないで信じる事が出来

る人だと私は信じていたんだよということなのかもしれません。

少なくとも、老年になった、ヨハネは、見る事が出来なかったトマス、イエス様は、恵みの外にいた人だとは考えておられなかった、むしろ、見なかったトマスこそを、イエス様は見ておられたし、そこにこそ、信仰者としての、本物の信仰を見ようとしておられたのだらうと、気づいたのかも知れないと思うのです。

そして、ヨハネは、このトマスに言われた言葉こそを、ヨハネの教会の人たちよ、イエス様を見ないで信じている豊明希望チャペルの貴方たちよと、私はあなたを見ている、あなたには、私が見えなくても、私は見ているし、私を見なくても、信仰の目によって私を認め、信じて歩んでいるあなたがたを、幸いだと言う、幸いな人たちだ、幸福な人たち、祝されるべき人たちと呼ぶのだとっておられるのだと思うのです。

(旧) 讚美歌 197 番に、「ああ主のひとみ、まなざしよ、うたがいまどう トマスにも、み傷しめして「信ぜよ」と、招くはたれぞ、主ならずや。」とあります。

ちなみに、歌詞の一番は、「去りゆきし富めるわこうど(若人)」で、二番は、「よわきペテロ」を歌い、三番で「うたがいまどう」トマスを歌うのです。いずれも、聖書の中で、イエス様を信じ切れなかった人たちです。しかし、そのひとりペテロが、教会の基礎ペテロと評価されます。

最後の4番は、その3人のことをまとめて、イエス様の思いをこう歌います。「きのうもきょうも かわりなく、血しおしたたる み手をのべ、「友よ、かえれ」とまねきつつ 待てるはたれぞ 主ならずや。」

信仰弱き3人であるが、イエス様の彼ら、そして、我らへの呼びかけは、「友よ」であれ、「私のところに来い、かえれ」という招きであり、主は、私たちを見捨てず、いつまでも待っておられるというのです。(歌いましょう→**讚美歌 197**)

今朝、主は、私たちにも言われるのです。あなたも強くない。また、人と比較して、イエス様の愛から簡単に離れる信仰者かも知れない。しかし、どうか、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」と語りかけ、今、信じる者には幸いだと、遅いと言うことはない、はげましてくださる、主に従って歩むこの週でありたいと思います。